

1947年のこと

可児光生 (美濃加茂市民ミュージアム)



〔写真1〕昭和30年ころの伏見・平井炭鉱

(1) はじめに

松本竣介、麻生三郎、舟越保武、この3人の年譜もしくは出品目録には、1947年(昭和22年)の出来事として岐阜の展覧会が次のように紹介されている。
「10月、岐阜県可児郡伏見にて、麻生三郎、舟越保武との三人展を開催」〔松本竣介年譜・1947年の項〕(『没後50年松本竣介展』1998年)
「10月、麻生三郎、舟越保武、松本竣介3人展(岐阜タイムス後援・全国亜炭労働組合本部)」〔麻生三郎年譜・1947年の項〕(『麻生三郎展』1994年)
「松本竣介、麻生三郎と三人展(岐阜県可児郡伏見町全国亜炭労働組合本部、10月)を開催」〔舟越保武年譜・1947年の項〕(『舟越保武の世界』1993年)
またこのことについて、朝日暁と村上善男は次のように記している。

「自由美術家協会展終了当時、「四虎会」の友人砂賀光一は、岐阜県可児郡伏見にある、「全国亜炭労働組合」に勤め、復員後まだ建築業には関係していない時代で、前年の暮れには竣介のアトリエ暖房用にとコーライトをたくさん送り届けたり、・・・」

「「全国亜炭労働組合」にいた砂賀は岐阜から上京してそうした土産物を届けた時、竣介がすでにみごとな立ち直りをみせ、アトリエに数点の小品も描かれているのを見て、岐阜の山間の地であるにしても、砂賀なりに絵を買いそうな亜炭関係の金廻りの良い数人の人達の目やすがあり、労働本部の建物なら陳列できると考えて展覧会を勧めた。・・・」

〔朝日『松本竣介』1977年〕

「・・・若干誤りがあるので正しておこう。まず、砂賀は当時東京在住で、労組に勤務したことはない。この亜炭の加工工場の経営者の家に、砂賀の実弟(四つ違い)が婿入りしていたので、その関係で、短期間(一週間とか十日間とか) 病弱の弟のために手伝いに行っていた、という関係である。したがって労組に勤める、ということはありませんし、できるはずもない。弟は幸二といいすでに亡い。・・・」

〔村上『松本竣介とその友人たち』1987年〕

戦後2年しか経っていないこの時期、第一線で活躍する作家の展覧会が地方で行われることはまれであった。前述の年譜や記述されていることが、どのような訳で、どのように行われたのか、という素朴な疑問が一つのきっかけとなり、今回(2008年)の展覧会の開催につながった。ここではまず、いわゆる戦後の動乱期、展覧会開催の場となった「岐阜の山間の地」が実際どのような社会状況にあったか、そしてどのような人々がこの展覧会に関わっていたかを、当時を知る人々の聞き取りや断片的な資料から少し整理し、事実関係を検証する手がかりとしたい。

(2) 亜炭の採掘とそれをめぐる人々

亜炭は質的には石炭に劣るものの、当時の産業復興の鍵を握る貴重な燃料資源として重宝された。第二次大戦前から採掘は行われていたが、そのピークは1947年であった。同年名古屋通産局管内で127万6千トン記録、のち徐々に減少していくことになる。埋蔵量の多い岐阜県では盛んに採掘され、全国の採掘量のうち岐阜県は40%、そのうち可児郡(注1)は70%を占め、国内最大の産出地として活況を呈していた〔写真1〕。

1947年、亜炭の炭鉱数は御嵩町だけで54にのぼる。それぞれに採掘権をもつ経営者がおり、国の方針によって経営者側の地方組織は何度も変遷するが、1947年当時は「岐阜県亜炭鉱業会」の名称のもとにまとめられていた。亜炭の採掘は一定の技術が必要で、また販路の確保などの面からも、中央からの人材が欠かせなかった。また、国策ともいべき事業であり、配給の関係もあって国(通産省)からの指導や統制があったようである。

経営者(鶴島炭鉱)の一人であり、可児郡中村の村長(1947年4月～1948年2月)でもあった早川準水はその頃、全国亜炭産業会副会長をつとめる(注2)など全国での実力者でもあった。鶴島炭鉱第十坑に働き、鶴島炭鉱本部(現在の御嵩町伏見)にはほぼ毎日日報などの書類を届けていたU氏(1926年生まれ)の記憶によると、その本部の実務担当者はT氏といい、通産省の関係で岐阜へ来た人物だった。T氏は秋田県で専門技術を習得した技術者を招き、名古屋から通わせていたという。地方の炭鉱といえどもその経営は優秀な人材によって進められ、資金も潤っていたようである。

採炭はツルハシを使つての手掘り作業が主体で、危険がともない極めて過酷な労働状況であった。しかし、出来高払いで賃金が支払われその額も高かったということもあり、内外から多くの人々が集まっていた。絵を見たり音楽を楽しみにする文化意識の高い労働者も多くいた。発足の年代は明瞭でないが、労働組合が組織され、1947年秋には「岐阜県亜炭従業員労働組合」の組合員数は1,083名であった。当時の新聞記事によると「可児郡伏見駅前広場にて初の全国亜炭労働組合大会開催」(注2)とあり、全国の亜炭労働者の拠点がこの地域であったことを物語っている。

N氏(1925年生まれ)は、復員後の1946年末頃に当時組合代表の「組合長」藤井健生氏(本名:只雄、八百津・伊岐津志に住んでいた)の誘いを受け、労働組合の専従として働いていた。N氏によると、藤井氏は戦前東京で仕事をしていたが、事情があって岐阜へ戻ってきていた。絶えず東京などに出向いてさまざまな情報交換を行い、子どもたちを集めて英語を教えたり、自主的な文化発表会を開くなど教育文化活動に関心があり実践をしていた。また、経営側と必ずしもギスギスとした対立関係であった訳でなく高いレベルでの信頼協力関係が築かれていたようである。

(3) 展覧会について

N氏(当時22歳)は、展覧会について鮮明な記憶があった。1947年、岐阜県亜炭従業員労働組合本部の事務所(板の間)の机などを片隅によせてスペースをつくり、藤井氏の指示のもと、そこで絵の展示が行われたというのである。組合本部とは当時の伏見口駅(現・名鉄明智駅)北にあった建物で、藤井氏が個人で取得したものである。その後、伏見口公民館として使用され〔写真2〕、現在は取り壊されその場所に明智公民館が建てられている(可児市広見平貝戸)。組合本部は、高いところに窓が数カ所あるだけの薄暗い土蔵造りの30坪ほどの建物であった。「かつての肥料倉庫を改修したものであった」と、このあたりに詳しい前述のU氏もその建物についてしっかりとした記憶があるという。

N氏によると、①耳の聞こえない画家ともう一人画家が来た。二人はいつも筆談し、鉛筆の上端の動きだけで理解しあっていたこと ②展示された絵は20～30点ぐらいであったこと ③事業主や組合員など1日に20～30人の来場者があり広告もしないのに多くの人が来た印象だった ④少女の絵が1点あり「これは自分の子供の絵だ」と画家が言っていたこと、他に赤茶色の絵があったこと ⑤画家二人は数日間泊まり、会期中にその二人と藤井氏やN氏を含め6名ほどで兼山(注:伏見の隣町)の料理屋で松茸を食べた。⑥会期中に藤井氏が自転車に絵を乗せて心当たりのあるところをまわり「日本で一番絵が売れたのはここだろう」と画家たちに言い、「そうだ」と返事したこと などが記憶にあるという。

調査の終盤になって前述の藤井健生氏(1951年43歳で没)の遺族から2枚の写真(写真3,4)の提供をうけた。写真3の裏面には「昭和二十二年十月八日」「美術展覧会記念」「岐阜県亜炭従業員労働組合」と記され、さらに人物すべてに名前が記されている。写真4には裏面の記載がないが、同日に会場内で撮影されたものである。まず、写真3について。昭和22年(1947)の10月8日、おそらく展覧会初日に本部前において藤井組合長を中心に炭鉱支部の委員18名と組合本部員5名が集まっている記念写真である。藤井個人としてではなく組合として関わった大きな催し物であったことが推察される。入り口向かって左側には「岐阜労働学(校)」の看板が英語表記とともに掲げられ、組合としての進取的で意欲的な学習活動が伺える。写真4について。前列中央の藤井をはさみ、向かって左が麻生三郎が右が松本竣介である。そして右端が松本の友人の砂賀(さが)光一である(前列左端は本部員の蓮本氏、後列右端が前述のN氏、



〔写真2〕岐阜県亜炭従業員労働組合本部であった建物(1993年撮影)



〔写真3〕「美術展覧会」記念写真①(1947年撮影)



〔写真4〕「美術展覧会」記念写真②(1947年撮影)

後列の3名は組合本部員)。壁面に黒幕を掛け、絵画5点と頭部の彫刻が展示してある。作品名ラベルは判読できないが、作品の間に掲示されている松本竣介の紹介文と思われるものには、一部「…自由美術協会員」とも読める。

まさに決定的な写真である。藤井氏は戦前(1940年ころ)まで、東京で「株式会社富士電気工業所」に勤め、のち名古屋へ転居後、1945年に実家である八百津に戻る。東京にいた間、どのような活動をしていたかその詳細はわからないが、帰郷後すぐに労働組合を立ち上げるだけの思想的基盤を学習し、人脈が築かれたはずである。藤井氏はそんな世界のどこかで砂賀氏(注4)らと出会い、心情的に通ずるところがあつて交流が深まってこの「美術展覧会」につながつたのではないかと推測されるのである。

地元の関係者の聞き取りをしている一方で川崎市の麻生三郎氏のお宅を訪問した。その際、家族の方から「手控え帖」があることを教えていただいた。それは麻生氏自身が生前、作品の売却先や譲渡先などを書き留めておいたものである。1947年の岐阜の展覧会の記録も残っており、そこには次のようなメモがしてあつた。

「子供3号 A / 6号 花 T / 4号 静物 / 6号 海 / 8号 海 伏見燃料 / 8号 花」

(注:AおよびTは個人名が記されているが、表記するには支障があると考え、差し控えた。)

U氏などからの聞き取りにより「A」及び「伏見燃料」は実在することがわかった。「A」とは、常時は御嵩にはおらず、採掘権をもって請負掘をさせていた炭鉱経営者であり、全国亜炭産業会理事もつとめる(注2)実力者であった。「伏見燃料」とは亜炭を加工(蒸し焼き)して「コーライト」を作り販売していた組織であり、同種の業務を行うところは他にあまりなかった(注5)。また、「T」は、前述の鶴島炭鉱のT氏の可能性が大きい。U氏の記憶によるとT氏は絵画に対する関心がとても高かった人物であった。時期については明瞭ではないが、その頃、複数の絵を事務所の応接間に一定期間掛けて展覧会のようにして鑑賞していたことははっきり覚えているという。T氏がこの時に購入した麻生氏の作品をふくめて展示していたことが想像される。

一方、松本の作品の行ぐえは大きな手がかりがなかった。しかし、展覧会終了時に「お世話になったお礼に」と関係者に渡された松本の作品が今回の調査中に、1点確認できたことは大きな収穫だった。

(4) 残る疑問

経営者側も組合側も、その幹部はともに中央とのつながりを持ち情報の交流が行われていた。これら高い文化的水準を持ち合わせた人々の存在が展覧会開催に至る経過とその結果の背景にあったことは、今回の地域の調査から推察することができる。しかし、開催のキーパーソンである「砂賀光一」と弟「幸二」の岐阜での動きおよび二人と労働組合との関係などについて、写真4において「光一」の存在は確認できたものの、それ以上を明らかにすることができなかった。

更に、村上のいう「加工工場」「砂賀幸二」「婿入り」説については、関係する人々を辿って聞き取りなどを行ったが、その裏付けはとれなかった。また、展覧会が「岐阜タイムス」の後援とされることについて、これが事実だとすれば開催までの経緯や関係者について何かしら判明することがあるだろうと考え調べたが、それらはいずれも確認できないままに終わった。

(注1) 可見郡は岐阜県の最南部で、現在は美濃加茂市に隣接する可見市及び可見郡御嵩町である。当時の旧制中学である東濃中学校や裁判所、警察などの各種公共機関が置かれるなど拠点的地域であった。現在の御嵩町は1947年当時、旧御嵩町、旧中村、旧伏見村、旧上之郷村で構成されていた。

(注2) 業界紙「亜炭情報」1949年5月1日号

(注3) 朝日新聞1947年12月14日記事。ただし同年12月20、21日の両日開かれる予定だったこの大会は結果的に中止となったという(N氏談)。

(注4) 砂賀氏(1912年生まれ)は松本と花巻の花城尋常小学校の同級生であり、上京後もさきわめて親しい間柄であった。村上善男の著書によれば、砂賀は花巻にいた頃「マルクス研究会の一員」として活動し「戦中秘かにリベラルな姿勢をとり続けて」いた。(村上善男『松本竣介とその友人たち』新潮社 1987年)

(注5) 『岐阜県労働運動史』(岐阜県 1987年) からもその存在が確認できる。

《主な参考文献》『岐阜県史・通史編・現代』岐阜県教育委員会 1973年/『可見町史・通史編』可見町 1980年/『御嵩町史・通史編・下』御嵩町 1990年/『伏見町誌』御嵩町伏見支所 1956年/『御嵩の亜炭』御嵩町教育委員会 2007年